大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

<原著>妊婦が親になることに対する態度の構成要素とInternal Working Modelとの関連(人文社会科学系)

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2009-08-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 鎌田, 佳奈美, 楢木野, 裕美, 鈴木, 敦子, 上野, 昌江
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010831

大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要，Vol. 7, No. 2, 2001
Bulletin of Osaka Prefecture College of Health Sciences

原　著

妊婦が親になることに対する態度の構成要素と Internal Working Model との関連*)

鎌田佳奈美[1)]，楢木野裕美[2)]，鈴木敦子[2)]，上野昌江[3)]
([1)]大阪府立看護大学医療技術短期大学部看護学科，[2)]大阪大学医学部保健学科，[3)]大阪府立看護大学)

Relationship between Readiness for Motherhood of a Pregnant Woman and Her Internal Working Model

Kanami Kamata[1)], Hiromi Naragino[2)], Atsuko Suzuki[2)] and Masae Ueno[3)]

([1)] Department of Nursing, Osaka Prefecture College of Health Sciences, [2)] Department of Nursing, School of Allied Health Sciences, Faculty of Medicine, Osaka University, and [3)] Osaka Prefecture College of Nursing)

A parent who suffered from child abuse is a risk factor in the occurrence of child abuse for his/her own child. This study analyzes the component factors of a pregnant woman's attitude toward parenthood and also clarifies the relationship between those attitudes and the mother's nature of attachment to her child. Questionnaires were distributed to 728 pregnant women, and 726 questionnaires were collected. The mother's attachment was assessed by using the Internal Working Models (IWM) scale; and the mother's attitude toward parenthood was assessed by Readiness for Parenthood. The major components of Readiness for Parenthood were divided into 7 categories: "an attachment to and acceptance of the child," "anxiety about child care," "a feeling of self-sacrifice," "a feeling of hate towards the child," "a traditional motherhood-idea," "expectations for child care," and "idea of the child." Significant correlation was found between the secure mothers and 2 categories: an attachment to and acceptance of the child and a traditional motherhood-idea. In addition, we found a correlation between the insecure mothers and 3 categories: anxiety about child care, a feeling of self-sacrifice, and a feeling of hate towards the child. After assessing the IWM of a pregnant woman, what kind of support and for how long that support is needed can be decided.

Key words: child abuse; internal working model; readiness for motherhood; pregnant woman

はじめに

わが子を虐待する親には，自身にも被虐待体験をもつものが多いことが，これまでの研究知見より明らかにされている[1-3)]。このような虐待の世代間伝達を説明するものとして，社会学習やモデリングの理論が用いられることが多かった。しかし，身体的虐待は身体的虐待，ネグレクトはネグレクトといった虐待行為の具体的パターンの連続性は必ずしも認められておらず，虐待行為が模倣学習されるという見方だけでは説明できていない。

近年，虐待は愛着関係の障害の表れであると考えられ，世代間伝達されるのは attachment の質であるとの見方が一般的になってきている[3,4)]。これらの理解や理論の基礎は Bowlby の attachment 理論[5)]から発展してきたものである。彼は以下のように述べている。子どもは，attachment 対象との日々の具体的相互作用を通して，徐々にその対象への近接可能性および情緒的応答性等に関する主観的確信，自己と他者の関係性に関する普遍化された表象，すなわち内的ワーキングモデル (Internal Working Model: 以下 IWM) を形成する。そしてこのような自身の被養育体験を基礎に形成した IWM をもとにさまざまな対人関係に適用し，やがて親

*) 子ども虐待の予防に向けた育児支援II
Childcare Support in the Interest of Preventing Child Abuse (Part 2)
連絡者：鎌田佳奈美

となった時，自分の子どもへの関わりにも影響をもたらす。たとえば，母親が安定した被養育体験をもとに子どもに関わる時，彼女らは支持的で応答的な養育を行う。この場合，子どもは母親をよいもの“安定した”(secure) ものととらえ，さらにそれに応じて自分を価値ある存在として内在化することが可能となる。一方，IWM が不安定な母親は，子どもに対し非応答的であったり拒否的な態度を示す。そのため子どもは，母親を悪いもの“不安定な”(insecure) ものとし，それに応じて自分が愛されるに値しない存在であるとの表象をつくりあげてしまうのである。このように，親自身の IWM は子どもの養育に影響を与え，彼らの attachment の発達に深く関連することを，日本においても数井ら[6]が実証している。さらに，Fonagy ら[7]は，養育に必要な基本的な資質を養う出発点として妊娠期をとらえ，妊娠期からの調査を行った。その結果，妊娠後期に過去の被養育体験によって内在化された IWM が安全なものではない (insecure) 母親は，その子どもとの関係においてもやはり安全でない関係をもつ危険性が高いことを明らかにした。これらの知見より，何らかの要素が確実に親から子どもへと伝達されていくことが示唆された。しかし，いったいいかなる過程を経て伝達されるのかといった世代間伝達のメカニズムについてはまだ十分に明らかにはなっていない。

そこで本研究は，心身共に非常に変動が大きく，子どもを養育するといった構えが形成される妊娠期[8,9]から出産後半年までの母親を対象に，自身の IWM と親になることに対する態度の関連を明らかにすることを試みた。第 1 報では妊娠期における IWM と親になることに対する態度の関連から，secure 傾向の妊婦は乳幼児や子育てに対して肯定的な態度を示し，insecure 傾向の強い妊婦は否定的であることを明らかにした。また，その傾向は妊娠初期より後期になるにつれ明確になることがわかった[10]。そこで今回は，妊婦が親になることに対する態度の構成要素を分析し，IWM との関連を明らかにしたので報告する。

方　　法

1. 研究対象者

調査対象は大阪府下の 5 病院の産科・産婦人科外来に通院している妊婦 1448 名である。

2. 研究方法

調査方法は病院での妊婦検診時に質問紙を配布し郵送にて回収した。質問紙は無記名とし，728 名から回収 (回収率 50.3%) したうち，有効回答数は 726 であり有効回答率は 99.7%であった。調査期間は 1999 年 10 月から 2000 年 5 月である。

3. 調査内容

調査内容は対象者の年齢，家族構成，妊娠以前の子どもとの接触体験の程度等の対象者の属性と，妊娠時の気持ち，計画妊娠の有無，胎動を感じた時の気持ち，attachment の質，親になることに対する態度である。

1) attachment の質

attachment の質とは，attachment 対象との持続的な相互交渉を通して人の内部に形成される attachment 対象と自己に関する心的表象である。その測定には Hazan と Shaver[11]が開発した内的ワーキングモデルをもとに，詫摩と戸田[12]が作成した IWM 測定尺度 (18 項目) を用いた。これは現在の大人の attachment の傾向を示すものと考えられている。評定は「全くそうでない」から「全くそのとおり」の 6 段階である。因子分析を行った結果，戸田らと同様な secure，ambivalent，avoidant の 3 つのタイプを抽出した。

secure 傾向とは「たいてい人は自分を好いており，すぐに知り合いができたり，気楽に人に頼られたりすることができる」という心的表象を他の群より相対的に強くもつ。ambivalent 傾向とは「自分を信頼できなく，本当に人から好かれているかについても自信がない。人といつも一緒にいたがるので疎ましく思われている」という自己に関する表象を相対的に強くもつ。avoidant 傾向とは「人と親しくなったり，親密な関係になることを嫌い，他者を全面的に信用できない」という心的表象を相対的に強くもつといった特徴がある[13-15]。

2) 親になることに対する態度

牧野ら[16-18]の「親になることへの準備状態」を測定する尺度を基に作成された親になることへの準備状態測定尺度 (27 項目) を用いた。これは，子育てを行う場合に必要な基本的な資質として，親となるための自覚だけでなく感情や行動も含まれている。乳幼児に対する項目群，子育てに関する項目群，親になることに関する項目群からなり，親としての資質の形成を測定する尺度である。IWM 同様「全くそうでない」から「全くそのとおり」の 6 段階評定である。

結　　果

1. 対象者

1) 対象者の属性

対象者の属性を表 1 に示した。母親の年齢は「30〜34

歳」が38.2%，「25～29歳」が37.9%と多く，20歳未満の若年妊婦は1.4%であり，平均年齢は30.0歳（SD＝4.5）であった。家族形態は89.7%が核家族であり，大阪府の平均80.0%（平成10年）を上回った。今回初めての妊娠であるのが58.3%であった。また，妊娠前の子どもとの接触体験は「よくあった」が13.8%「たまにあった」は33.2%で半数以上が子どもとの接触体験の少ない状況での妊娠であった。

2）妊娠時の状況

対象者の妊娠状況を表2に示した。50.6%が計画妊娠であり，妊娠時期では後期が57.1%と最も多く，中期が32.0%であった。妊娠初期の心身共に不安定な時期を越えていたものが多かったためか，現在の体調に関しては84.5%が「良好」あるいは「どちらかといえば良好」と答えていた。妊娠を知った時の気持ちでは「嬉しい」が74.2%であったが，「困った」「どちらかといえば困った」ものも9.4%いた。胎動を感じた時の母になった実感では「実感した」が63.9%，「どちらかといえば実感した」は26.8%と大半が実感しており，「実感しなかった」「どちらかといえば実感しなかった」ものは9.3%と1割近くいた。

2. 親になることに対する態度

親になることへの準備状態測定尺度27項目についての回答を因子分析した結果を表3に示した。主成分分析にて因子の抽出を行った結果，固有値1.0以上の因子が8因子抽出された。さらに固有値の減少傾向および解釈の可能性を考慮して7因子を採択し，バリマックス回転を行った。7因子が説明する分散は55.1%であった。各因子について負荷量の0.4以上の項目を示した。

第Ⅰ因子は「赤ちゃんを何時間みても飽きない」「赤ちゃんをみていると抱きしめたくなる」「何時間でも子どもと遊んでいたい」「子どものおもりを頼まれたら喜んで引き受ける」「赤ちゃんをみていると楽しい」「子どもの世話は楽しい」などの項目に高い正の負荷量が示された。これらの項目は，子どもや育児に対する感情的領域・行動的領域を示したもので，子どもに肯定的な感情を抱き，受け入れようとしている態度であると解釈し，＜子どもへの愛着・受容＞と命名した。

第Ⅱ因子は「赤ちゃんの世話は不安」「赤ちゃんのことはよくわからない」「子どもを育てる自信がない」に高い正の負荷量であった。これらは育児に対する不安な思いに関する内容であることから＜育児への不安感＞と解釈した。

第Ⅲ因子は「親は子どものために自由な時間が減る」

表1　対象者の属性

年　齢	n＝726　(%)
20歳未満	10 (1.4)
20～24歳	60 (8.3)
25～29歳	275 (37.9)
30～34歳	277 (38.2)
35歳以上	104 (14.2)
家族構成	**n＝726　(%)**
核家族	651 (89.7)
親と同居	62 (8.5)
単親	5 (0.7)
その他	8 (1.1)
子どもの有無	**n＝726　(%)**
あり	300 (41.3)
なし	423 (58.3)
不明	3 (0.4)
子どもとの接触体験	**n＝726　(%)**
よくした	100 (13.7)
たまにした	241 (33.2)
殆どない	174 (24.0)
全くない	145 (20.0)
仕事	65 (9.0)
不明	1 (0.1)

表2　妊娠時の状況

妊娠の計画性	n＝726　(%)
計画的である	367 (50.6)
計画的でない	309 (42.6)
その他	50 (6.8)
妊娠時期	**n＝726　(%)**
初期	79 (10.9)
中期	232 (32.0)
後期	415 (57.1)
現在の体調	**n＝726　(%)**
良好	353 (48.7)
どちらかといえば良好	260 (35.8)
どちらかといえば不良	94 (12.9)
すぐれない	19 (2.6)
妊娠を知った時の気持ち	**n＝726　(%)**
嬉しい	539 (74.2)
どちらかといえば嬉しい	114 (15.7)
どちらかといえば困った	56 (7.7)
困った	12 (1.7)
不明	5 (0.7)
胎動時の母になる実感	**n＝620　(%)**
実感した	396 (63.9)
どちらかといえば実感した	166 (26.8)
どちらかといえば実感せず	48 (7.7)
実感しなかった	10 (1.6)

表3 親になることに対する態度項目の因子分析

項　　目	I	II	III	IV	V	VI	VII
赤ちゃんを何時間みても飽きない	.824						
赤ちゃんをみていると抱きしめたくなる	.789						
何時間でも子どもと遊んでいたい	.788						
子どものおもりを頼まれたら喜んで引き受ける	.730						
赤ちゃんをみていると楽しい	.728						
子どもの世話は楽しい	.707						
赤ちゃんの泣き声は耳障り	−.550						
妊娠でお腹の大きい女性をみると微笑ましい	.530						
自分の子どものために何でもしてあげたい	.476						
できれば子どもはたくさん欲しい	.467						
赤ちゃんの世話は不安		.860					
赤ちゃんのことがよくわからない		.817					
子どもを育てる自信がない		.721					
親は子どものために自由な時間が減ると思う			.702				
親は子どものために我慢するばかりだ			.687				
子育ては毎日同じことの繰り返しだ			.566				
赤ちゃんの側に居たくない				.890			
子どもがうるさくしているとイライラする				.838			
子どもを保育所に預けることはよくない					.711		
子どもは小さいときは母親の方が子育てに向いている					.546		
自分はよい親になれると思う					.520		
親は子どもから学ぶことが多い						.615	
自分の子どもがどんな子どもになるか楽しみ						.482	
赤ちゃんは1人で何もできないもの							.705
小さな子どものわがままは仕方ない							.567
固　有　値	4.986	2.337	1.773	1.676	1.431	1.429	1.240
寄　与　率 (%)	18.468	8.654	6.567	6.209	5.298	5.292	4.593
累積寄与率 (%)	18.468	27.122	33.689	39.898	45.196	50.488	55.081

「親は子どものために我慢ばかりする」「子育ては毎日同じことの繰り返し」などで高い正の負荷量であった。これらは育児に対し，子どもの欲求よりもむしろ自身の欲求を優先した価値観であると解釈し，＜自己犠牲感＞とした。

第IV因子は「赤ちゃんの側に居たくない」「子どもがうるさくしているとイライラする」で高い正の負荷量であった。子どもに対し拒否的・否定的な気持ちが強いと考え＜子どもへの嫌悪感＞とした。

第V因子「保育所に子どもを預けるのはよくない」「子どもが小さい時は母親が子育てに向いている」「自分はよい親になれると思う」に正の負荷量を示した。これらは社会から要請されている女性役割の受容ととらえ＜伝統的母性観＞とした。

第VI因子は「親は子どもから学ぶことは多い」「自分の子どもがどんな子どもになるか楽しみ」で正の負荷量を示し，親になることに対し希望や期待をもっていると解釈し＜育児への期待感＞とした。

第VII因子は「赤ちゃんは1人では何もできないもの」「子どものわがままはしかたがない」で正の負荷量を示した。子どもへの認識を示しており＜子ども観＞とした。

以上のように，親になることに対する態度は＜子どもへの愛着・受容＞＜育児への不安感＞＜自己犠牲感＞＜子どもへの嫌悪感＞＜伝統的母性観＞＜育児への期待感＞＜子ども観＞の7要素から構成されていた。

3. 親になることに対する態度の下位尺度得点とIWMの下位尺度得点の偏相関

親になることに対する態度の因子分析で得られた各要素に含まれる項目群の合計得点を算出し，下位尺度得点とした。同様に，IWM尺度の各傾向を示す項目群の合計得点を下位尺度得点とした。両下位尺度得点における相関の結果を表4に示した。IWMの3つの傾向は個人内に併存するため，相互の影響を制御するために偏相関を用いた。

その結果，IWMのsecure傾向は親になることに対する態度の＜子どもへの愛着・受容＞および＜伝統的母性観＞との間に0.1%水準で有意な正の相関がみられた。次にambivalent傾向は＜自己犠牲感＞および＜子ども

表4 親になることに対する態度の下位得点と Internal Working Model 下位得点の偏相関

	secure	ambivalent	avoidant
<子どもへの愛着・受容>	.233***	−.235***	−.069
<育児への不安感>	−.104**	−.063	.366***
<自己犠牲感>	.062	.131***	.165***
<子どもへの嫌悪感>	−.079	.146***	.052
<伝統的母性観>	.220***	.045	−.037
<育児への期待感>	.072	−.012	−.075*
<子ども観>	−.022	−.064	.006

n=726　　***p<.001　**p<.01　*p<.05

への嫌悪感>との間で0.1%水準の有意な正の相関を認めた。また，<子どもへの愛着・受容>には0.1%水準で有意な負の相関を示した。さらに，avoidant傾向は<育児への不安感>および<自己犠牲感>との間で0.1%水準の高い正の相関を示し，<育児への期待感>との間では5%水準で有意な負の相関を示した。

考　　察

本研究では，妊婦のattachmentの傾向をIWM測定尺度で，親になることに対する態度を親になることへの準備状態尺度で測定した。そして，親になることに対する態度の構成要素を分析し，IWMとの関連性を検討した。その結果，IWMの傾向によって妊娠期からの親になることに対する態度の違いが明らかになった。

過去から現在の自身の親との関係に肯定的な認識をもつsecure傾向は，産まれる前から子どもへの愛着や受容を強く示すという，養育に対するポジティブな態度と関連があった。このような幼い子どもに対する関心や好意的な感情は，現在定義されている「母性」の構成要素として確実に含まれており[8,9]，養育行動を喚起し維持するためには不可欠であると考えられた。

一方，自分を信頼できず本当に人から好かれているかについても自信がない，人といつも一緒にいたがるのを疎ましく思うambivalent傾向は，子どもへの愛着や受容はなく，強い嫌悪感をもっており，親になることは自己犠牲を強いられるといった否定的な態度と関連していた。また，人と親しくなったり親密な関係になることを嫌い，他者を全面的に信用できないというavoidant傾向でも，育児への強い不安感とambivalent傾向同様の自己犠牲感との間で関連性を示した。CrowellとFeldman[19]は，insecureなIWMをもつ母親の養育行動の特徴として，子ども自身の欲求より自分自身の欲求や思考を優先することをあげている。今回の結果からも，insecureなIWMをもつ妊婦には<自己犠牲感>が共通して関連しており，すでに妊娠期から自己中心的な思考の特徴が内在していることを示唆した。以上のことから，虐待の世代間伝達の連鎖を断ちきるためには，妊娠期から母親のIWMに着目し，予防的ケアを展開することが必要であると考えられた。

Fonagyら[7]は，妊娠中に抱く子どもや育児に対するネガティブな感情に対し，母親は強い防衛を示すが，それは妊娠期の面接を通して推測が可能であると述べている。また，宮内ら[20]も，子どもを虐待する母親は妊娠中から特徴的な言動がみられるとし，リスクをもつ母親の発見の可能性を指摘している。本結果から示された<子どもへの嫌悪感><自己犠牲感><育児への不安感><子どもへの愛着や受容が感じられない><育児への期待感がない>といった態度を指標とすることで，insecureなattachment傾向をもつ母親を妊娠期から見極めることが可能であると考える。とりわけ，「母性感情を発達させる契機である妊娠が確定した時，胎動を自覚した時」[8]に彼女らの態度を注意深く観察する必要があろう。

今回，secure傾向は<子どもへの愛着・受容>といったポジティブな感情および行動領域の項目との間で関連が示された。しかし一般に，態度とは感情・認識・行動領域の3つの側面から形成されるものである。ここで示された<子どもへの愛着・受容>の項目には，認識領域の項目が欠如しており真の態度とはいい難い。このことは母親の態度の不安定さを示しているとも考えられる。さらに，彼女らは「保育所に預けるのはよくない」「子どもが小さい時は母親の方が子育てに向いている」等の伝統的母性観と非常に強く関連していた。このような性役割観があまりにも強すぎると，「母親になった後，育児を生きがいとするあまり過保護過干渉に陥り子どもの分離不安を助長したり，仲間集団への適応を妨げたりすることも懸念される」といわれている[8]。また，ともすれば母親の育児を孤立させ，自身を追い込んでいく原因ともなりかねない。したがって，このような伝統的な母

性観にとらわれず，地域社会全体で子育てをしていくという認識を育んでいけるような支援施策も重要である。

最後に今後の課題について述べる。IWMは自身の被養育体験によって形成されたものであるが，現在においてその体験をいかに意味づけているかを反映するものである。したがって，これまでの生涯発達のなかでの体験あるいは現在の夫婦関係やサポート状況等全てがIWMの形成に影響していると考えられている。しかし，どのような状況でどのような影響を受けるのか等は明確にされておらず，今後は母親の属性をも含めたさらなる検証を行うことが必要である。

おわりに

妊婦のIWMと親になることに対する態度の分析から以下のことが明らかになった。

1. 妊婦が親になることに対する態度について因子分析を行った結果，その態度は<子どもへの愛着・受容><育児への不安感><自己犠牲感><子どもへの嫌悪感><伝統的母性観><育児への期待感><子ども観>の7つの構成要素から成り立っていた。
2. 親になることに対する態度とIWMの関連では，secure傾向は<子どもへの愛着・受容><伝統的母性観>との間で強い正の相関があった。
3. ambivalent傾向は<自己犠牲感><子どもへの嫌悪感>に正の相関を示し，<子どもへの愛着・受容>で強い負の相関を示した。
4. avoidant傾向では<育児への不安感><自己犠牲感>に強い正の相関があり，<育児への期待感>に負の相関が認められた。

不幸な被養育体験をもつ母親が虐待を繰り返さないためには，子どもや育児に対するネガティブな感情を母親自身が認識し，より率直に早期の自身の経験や虐待のサイクルを繰り返す可能性についての懸念を語ることが必要である[25]。このことは，母親が自分の不幸な子ども時代の経験を十分に乗り越えた (work through) ことを意味する。母親が過去の経験を乗り越えるためには社会的サポートが必要であり[3]，妊娠，出産，育児の時期を経て必ず接点をもち長期に渡って関わる看護職の果たす役割は非常に大きい。

謝辞

調査にご協力下さいました妊産婦の皆様，病院の婦長，看護婦の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は平成11～13年度文部省科学研究費の助成を受けた研究の一部である。また，平成13年度小児保健学会で発表した内容に加筆したものである。

文献

1) 渡辺久子 (1998) 虐待の世代間伝達を断ち切る. 助産婦雑誌, 52:674-680.
2) Steele, B.F., *et al.* (1968) A psychiatric study of parents who abuse infants and small children, "The Battered Child" (ed. by Helfer, R. and Kempe, C.H.), University of Chicago Press, Chicago, p.81-114.
3) 鵜飼奈津子 (2000) 児童虐待の世代間伝達に関する一考察－過去の研究と今後の展望－. 心理臨床学研究, 18:402- 411.
4) 遠藤利彦 (1992) 内的作業モデルと愛着の世代間伝達. 東京大学教育学部紀要, 32:203-220.
5) Bowlby, J. (1969) Attachment and loss, "Attachment", Basic Books, New York [黒田実郎, 大羽 蓁, 岡田洋子, 黒田聖一訳 (1976) "母子関係の理論", 岩崎学術出版, 東京, p.1-482.]
6) 数井みゆき, 遠藤利彦, 田中亜希子, 坂上裕子, 菅沼真樹 (2000) 日本人母子における愛着の世代間伝達. 教育心理学研究, 48:323-332.
7) Fonagy, P., Steele, H. and Steele, M. (1991) Maternal representations of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. Child Development, 62:891-905.
8) 戸田まり (1990) 母性形成と発達. 発達の心理学と医学, 1:303-311.
9) 大日向雅美 (1996) "母性の研究", 川島書店, 東京, p.7-48.
10) 楢木野裕美, 鎌田佳奈美, 鈴木敦子 (2001) 子どもの虐待予防に向けた育児支援Ⅰ－妊娠各期における妊婦のInternal Working Modelと親になることに対する態度の関連－. 日本小児看護学会誌, 20:51-57.
11) Hazan, C. and Shaver, P. (1987) Romantic love conceptualized as an attachment process. J. Pers. Soc. Psychol., 52:511-524.
12) 詫摩武俊, 戸田弘二 (1988) 愛着理論からみた青年の対人態度－成人版愛着スタイル尺度作成の試み－. 東京都立大学報, 196:1-16.
13) 戸田弘二 (1992) Internal Working Models研究

の展望. 北海道医療大学教育学部紀要, 55: 133-143.

14) 久保田まり (1995) "アタッチメントの研究", 川島書店, 東京, p.1-110.

15) 遠藤利彦 (1992) 愛着と表象ー愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の外観ー. 心理学評論, 35:201-233.

16) 牧野カツコ, 中西雪夫 (1987) 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育 (第1報) ー「準備状態」測定尺度の作成ー. 日本家庭科教育学会誌, 32:51-53.

17) 中西雪夫, 牧野カツコ (1987) 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育 (第2報) ー「準備状態」の形成に影響を与える要因ー. 日本家庭科教育学会誌, 32:55-59.

18) 中西雪夫, 牧野カツコ (1987) 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育 (第3報) ー「準備状態」の構成要素の分析と保育教育への示唆ー. 日本家庭科教育学会誌, 32:61-65.

19) Crowell, J.A. and Feldman, S.S. (1988) Mother's internal models of relationships and children's behavioral and developmental status in mother-child interacation. Child Development, 59:1273-1285.

20) 宮内和枝, 口村巳和, 高野麻紀, 牧野真千子, 井上佳子, 長濱 博子, 中田 健, 中西真弓, 小林美智子, 末原則幸 (1996) 周産期における虐待予防の検討ー助産婦の立場から予防を考えるー. 日本母性衛生学会誌, 38:149-152.

(受付日 2001 年 10 月 18 日, 受理日 2001 年 12 月 19 日)